

..... 編集後記 .....

◆ 今度はインドで来ましたか、数学大国、人材輸出大国、地下資源も石炭や鉄に限れば豊富、しかし人口が多すぎますか、紹介された鉱山のような銅などの資源はそれほど豊かではありません。現在採鉱しているのは国営の企業で、近いうちに民営化されるとのことですが、経営形態は複雑なのだそうです。

◆ 大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国と併せても、日本の面積の6割程度しかないにも関わらず、その景色は大陸的で、などと子供時代に学校で習ったことを覚えています。その地質も大陸的で、と昔は習ったのですが、日本とそっくりの第三紀の地質に、同じような規模のゼオライト鉱床があるのですか。

◆ 今から30年ほど前に、わが国で最も必要とされている地質の知識は都市部の軟弱地盤に関するものであると聞かされました。しかしながら地質の学界では、そんなものを扱っている研究者は全くの少数派でした。地質屋は次第に無視されるようになり、様々な工法を駆使する土木技術だけが発達しました。地質環境汚染問題では、地質研究者は、事が起こる前に、先駆的に貢献することができたのでしょうか。日本の保険会社では、何人くらの環境地質の専門家が働いているのでしょうか。

◆ 伊豆諸島は何県に属しているか、などというクイズはよく出題されます。では、それらの島の住民と本土の東京都民との1人当たりの税金投入額はどちらが多いでしょうかなどというクイズは出されません。楽しい話題ではないからでしょうか。歴史的に複雑な問題もあります。三宅島で、今またそれが問題になっています。住民が何を考えているのか、行政当局はどうしようと思っているの

か、なかなか部外者にはわかりません。

◆ 高いところに登るのが好きな人がいれば、狭いところにもぐるのが好きな人もいます。1983年の三宅島噴火の後、割れ目火口の中に入らないかと誘いを受けたことがありました。評者には洞窟探検の技能がないので、その時は遠慮しました。先日テレビで放映されたカリマントン島の世界最大級の洞窟探検で、取材班は、洞内の高さを測るのに、風船を使っていました。簡単に軽量・安価な精密測量機器が市販されているはずなのですが、いろいろな方法があります。洞窟探検の方法は続編で紹介されるそうです。

◆ 東アジア地質図は、値段が少々お高いのですが、機会があればどこかで見られることをお勧めします。内陸の巨大な堆積盆は、現在のどの地形、地質と同じ状況でできたのかなど、時間やスケールを変えて考えてみる必要を感じさせてくれる壮大な図面です。

◆ 中年探偵団の止まることを知らない石行脚は、雨が降っても強行されるのです。手塚 治の漫画に出てきたあの石かと昔を思いだされたあなたも、現物をご覧になれば、また何か奇想天外なアイデアが浮かぶかもしれません。

◆ 巨大な石灰岩の塊がなぜここにあるのか、我々のちょっと先輩の時代には理解しがたい問題だったはずですが、それだけ地質学は急激に発展したと言えるのか、それとも遅れている学問分野ということになるのでしょうか。きれいな岩石でできた景色の影にある研究の成果は、ぜひ多くの訪問者に現地でも知ってもらう方法を考えるべきです。ただし、わかりやすくですよ。

(須藤 茂)

地質ニュース編集委員会

委員長：須藤 茂

副委員長：谷田部信郎

委員：高木哲一・関口春子・中島 隆・  
安川香澄・飯笹幸吉

連絡先：地質調査総合センター 地質標本館  
〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1  
Tel. 029-861-3754  
Fax. 029-861-3569

地質ニュース	第592号	2003年	12月号
	定価 ¥785 (本体価格 ¥748) 円実費		
	2003年12月1日	発行	
編集	産業技術総合研究所		
発行人	株式会社 実業公報社		
	代表者 林 光生		
発行所	株式会社 実業公報社		
	東京都千代田区九段北1の7の8 〒102-0073		
	Tel. (03) 3265-0951 Fax. (03) 3265-0952		
	E-mail: jk@jitsugyo-koho.co.jp		
	振替口座 00110-6-32466		
	麹町局私書箱第21号		
印刷	株式会社 エアフォルク		

© 2003 Geological Survey of Japan

●本誌は東京都の霞ヶ関政府刊行物サービスセンターに常備してあります。また、最寄りの書店でも注文できます。

地質ニュースに関するご意見は編集委員会へ